

# 大学教員セミナー参加報告

## 「語学教育のあり方～グローバル社会の中での大学教育を考える～」

基礎教育センター所属・教授  
加藤 光也

英語教育担当教員である福島富士男、神田明延、加藤光也の3名は、本学のFD活動の一環として、平成17年9月3日（土曜）から4日（日曜）にかけ、八王子セミナーハウスで開催された第43回大学教員セミナー「語学教育のあり方～グローバル社会の中での大学教育を考える～」のうち、3日の講演会に参加し、竹前文雄（目白大学教授）、尾鼻靖子（信州大学助教授）、内田勝一（早稲田大学教授）、笹田巖（東京学芸大学附属高校大泉校舎教諭）各講師の講演を聞いてきた。

いずれも英語教育の現場で現在、改革・改善に取り組んでいる実践者からの報告であり、いろいろな点で参考になったので、加藤が代表として以下に各講師の講演要旨と感想をまとめ、本学における英語教育について考える際の参考資料としたい。

### 1. 竹前 文夫「大学における外国語教育——分岐点に立って」

竹前氏は亜細亜大学等でさまざまな英語教育プログラムの立案・運営に携わっているが、これまでの日本における英語教育の歴史と、現在の英語教育に対する厳しい批判を踏まえ、今後求められるのは、国際的な場でも通用する新しいコミュニケーション能力、相手の言いたいことを的確につかむ「文脈力」であると指摘し、そのような英語教育のプログラムを考える際の視点として、従来のmultilingualism（多言語主義）に替えて、plurilingualism（EUの理念ともなっている、異文化コミュニケーションを促進し自らのアイデンティティの表現を豊かにする、複数言語主義）という考え方を紹介し、物事を批判的に見る思考法（critical thinking）をも取り入れた総合的な英語教育プログラムの策定を提唱した。

「複数言語主義」は、英語と限らず、これから言語教育を幅広い視点から考える上で貴重なものと思われたし、ほかにも、英語教育の今後の課題として、教室外の語学（語

学学校の利用等）との調和など、興味深い示唆があった。

\* EUの言語政策については以下のサイトから日本語訳をPDFファイルで入手できる。  
<[www.jpfi.go.jp/japan\\_j/publish/euro/pdf/01-1.pdf](http://www.jpfi.go.jp/japan_j/publish/euro/pdf/01-1.pdf)>

### 2. 尾鼻 靖子「信州大学における使える英語への改革——共通教育新カリキュラム」

オーストラリアの大学でTESOLの実践経験がある尾鼻氏の講演は、平成18年度から信州大学（1学年2,000人規模、学生は3段階のレベル分け）で実施する新カリキュラム開発についての報告で、尾鼻氏が学外のNSE（Native Speaker of English）たちと開発中という新カリキュラムは、NSE担当授業での学生の主体的な選択、調査、まとめによる学習を提案する新鮮なものであり、学ぶ学生の視点に立ったプログラム案については、フロアからも賛同の意見があった。ただし、信州大学では学部・学科ごとに英語カリキュラムを選ぶことになっており、尾鼻氏のカリキュラムを採用するのは一学部だけの予定とのことだった。（ほかには日本人専任を中心とする従来の英語教育を採用する予定。）

現在企画中のプログラムであり、その成果については来年度以降の実施状況を見なければ分からないが、適切なNSE講師を十分に確保できるかどうか、学生主体の授業で評価をどう統一するか、専任教員を活用しないカリキュラムが大学全体の英語教育でどう位置づけられるのかなど、今後の課題も多いように思われた。

### 3. 内田 勝一「『英語を学ぶ』から『英語で学ぶ』へ」

平成16年（2004年）4月に開設された早稲田大学国際教養学部（1学年500人規模、学生は3段階のレベル分け）の英語教育についての、学部長の内田氏からの報告である。

国際教養学部における英語教育プログラムの概要は、NSE の専任 2 人がコーディネーターとなり（一人はイギリス小説の専門家）、授業は Waseda International の NSE 講師に委託。入学以前に TOEFL で 3 段階のレベル分けを行い、一つのクラスは講師一人に学生 4 人という少人数教育で、学生は 1 年間で TOEFL のスコアが 40 点くらい上がったとのこと。

内田氏は法学の専門家であるが、いくつか興味深いコメントがあった——大学生にとっては抽象的思考能力が肝心であり、帰国生よりも、一般入試、センター入試学生を鍛えたほうが、総合的学力の点では効果的かもしれない、とのこと。

国際教養学部方式では、委託授業での講師の質をどのように確保するか（人件費の関係からおもに 30 代の講師を利用し、短期間で入れ替えとのこと）、また、二人のコーディネーターだけが専任の体制で、はたして責任ある英語教育を実施できるのかどうかなどの問題があると思われた。また、学部の性格から帰国生も多く、英語学習には意欲的な学生が多いように思われたが、すべての学生が一年間、海外に留学するという一方で、それに伴う負担も少なくないと思われた。

#### 4. 笹田 巖「中等教育における語学教育の現状」

笹田氏の話は、海外からの帰国生を受け入れる東京学芸大学附属高校大泉校舎（1 学年 50 人）で帰国生を教えている現場からの体験的報告。

現場の教師としては、投資効果の結果を求めるビジネスモデルとしての教育（いい大学からいい企業へ）より、人間教育としての教育モデルに足場をおきたいとの立場から、ネイティブ信仰は間違いである、中高校生には母語でない言語を道具として使いこなすことなどできない、動機のない生徒に教えることは徒労である、早期英語教育はどれほど有効か分からないなど、いろいろ率直な意見が述べられた。笹田氏の、英語信仰に対する率直な批判には、共感する聴衆も多かったようである。

笹田教諭が受け持っているのは海外からの帰国生であり、特別な事例と思われるが、笹田教諭が授業で実際に使用している教材プリントの見本は、生徒に英語でさまざまなことを考えさせる、よく工夫されたものだった（生徒はそれを素材にして英語で議論するとのこと）。

以上、4 人の講師の講演から、大学における英語教育の改革では、いずれの大学でも、いわゆる「実用・実践英語」への大きな傾斜が見られることが分かったが、全体として、担当講師の質の確保、専任教員と非常勤あるいは外部委託の NSE 講師との責任分担、評価基準の設定など、今後まだ試行錯誤を続けるほかない課題が多くあるように思われた。本学においても、NSE 専任教員の不在や、専門課程における英語教育の継続、全学的なサポート体制の構築、学生の意見を参考にする仕組みの整備など、取り組むべき課題は多い。

今回のセミナーについては、参加者 3 人の都合で 3 日夜から翌日にかけておこなわれた討議や質疑応答には参加できず、多くの問題点について講師と話し合うことができなかったため、この報告ももっぱら講演内容に基づいたものであることをお断りしておく。（討議に参加していれば、報告内容も少し違ったものになっていたかもしれない。）

なお、本セミナーには本学から加藤洋子教務課長も出席していたので、ここに付記しておく。